貧書生

内田魯庵

青空文庫

「やい亀井、何しおる？　何ぢや、懸賞小説ぢや――ふッふッ、」と宛も馬鹿にしたやうに冷笑つたはズングリと肥つた二十四五の鬚※々の書生で、垢染みて膩光りのする綿の喰出した褞袍に纏まつてゴロリと肱枕をしつゝ、板のやうな掛蒲団を袷の上に被つて禿筆を噛みつゝ原稿紙に対ふ日に焼けて銅色をしたる頬の痩れて顴骨の高く現れた神経質らしい仝じ年輩の男を冷やかに見て、「汝も懸賞小説なんぞと吝な所為をするない。三文小説家になつて奈何する気ぢや。」

「先ア黙つてろよ。」と亀井と呼ばれた男は顧盼つて軟や得意らしき微笑を浮べつ、「之でも懸賞小説の方ぢやア亀之屋万年と云つて鑑定証の付いた新進作家だ。今度当選つたら君が一夜の愉快費位は寄附する。」

「はッはッ、減らず口を叩きくさる。汝の懸賞小説も久しいもんぢや。一度当選つたといふ事ぢやが、俺と交際つてからは猶だ当選らんぞ。第一小説が上手になつたら奈何するのぢや。文士ぢやの詩人ぢやの大家ぢやの云ふが女の生れ損ひぢや、幇間の成り損ひぢや、芸人の出来損ひぢや。苟くも気骨のある丈夫の風上に置くもんぢやないぞ。汝も尚だ隠居して腐つて了ふ齢ぢやなし。王侯将相何ぞ種あらんや。平民から一躍して大臣の印綬を握む事の出来る今日ぢやぞ。なア亀井、筆なんぞは折つぺしッて焼いて了へ。恋ぢやの人情ぢやのと腐つた女郎の言草は止めて了つて、平凡小説を捻くる間に少と政治運動をやつて見い。」

「はツはッ、僕は大に君と説が異う。君は小説を能く知らんから一と口に戯作と言消して了うが、小説は科学と共に併行して人生の運命を……」

「措いて呉れ、措いて呉れ、小説の講釈は聞飽きた、」と肱枕の書生は大欠伸をしつゝ上目で眤と瞻めつ、「第一、汝、美が如何ぢやの人生が如何ぢやのと堕落坊主の説教染みた事を言ひくさるが一向銭にならんぢやないか？」

「今度は当選る、」と懸賞小説家は得意な微笑を口辺に湛へつ断乎たる語気で、「三月以来思想を錬上げたのだから確に当選る。之が当選らぬといふ理由は無い……」

「汝は自慢ばかりしおるが一度も当選つた事は無いぞ。併し当選つた処で奈何する、一年に二度や三度、十円や十五円の懸賞小説が取れたッて飯は食へんぞ。」

「勿論僕は筆で飯を喰ふ考は無い。」

「筆で飯を喰ふ考は無い？　ふゥむ、夫ぢやア汝は一生涯新聞配達をする気か。跣足で号外を飛んで売つた処で一夜の豪遊の足にならぬワ。」

「僕は豪遊なんぞしたくない。斯うして新聞配達をしながら傍ら文学を研究してゐるが、志す所は一生に一度不朽の大作を残したいのだ。飯喰の種は新聞配達でも人力車夫でも立ちん坊でも何でも厭はないのだ。」

「吝な野郎ぢやナ。一生に一度の大作を残して書籍館に御厄介を掛けて奈何する気ぢや。五体満足な男一匹が女や腰抜の所為をして筆屋の御奉公をして腐れ死をして了つては国家に対す

る義務が済むまい。なッ亀井。俺の忠告に従つて文学三昧も好い加減に止めにして政治運動をやつて見い。奈何ぢや、牛飼君の許から大に我々有為の青年の士を養うと云ふて遣したが、汝、行つて見る気は無いか。牛飼君は士を待するの道を知りおる。殊に今度の次の内閣には国務大臣にならるゝ筈ぢやから牛飼君の客となるは将に大いに驥足を伸ぶべき道ぢや。」

「僕は政治家は嫌ひぢや。」

「なにッ、政治家は嫌ひぢや、」と呆れたやうに眼を※つて、「汝は能く〳〵な腰抜けぢやナ。天下の権を握つて四海に号令するは男子の大愉快ぢやないか……」

「それはナ天下の権を握つたら愉快だらうが、」と懸賞小説家は流眄に冷笑しつ。「君等のやうな壮士の仲間入りは感服しないナ。」

「何ぢや、失敬な事吐かす、」と肱枕君は勃と起直りて故とらしく拳を固め、「伊勢武熊は壮士の腐つたのぢやないぞ。青年団体の牛耳を握りおる当今の国士ぢや、」と言掛けたが俄に張合抜けしたやうに拳を緩めて、「そぢやが汝のやうな腰抜には我々燕趙悲歌の士の心事が解りおるまい。斯うして汝等と同じ安泊に煤ぶりおるが、伊勢武熊は牛飼君の股肱ぢやぞ。牛飼君が内閣を組織した暁は伊勢武熊も一足飛に青雲に攀ぢて駟馬に鞭つ事が出来る身ぢや。白竜魚服すれば予且に苦めらる。暫らく、志を得ないで汝のやうな小説家志願の新聞配達と膝組で交際ひおるが……」

「ふッふッふッ。」

「何笑ひおる、」と伊勢武熊は真摯に力味返つて、「功名咄をするやうぢやがナ、此前牛飼君が内閣の椅子を占められた時、警部長の内命を受けたが、大丈夫豈田舎侍を甘んぜんや。己は首を掉つて受けなかつた。牛飼君も大いに心配してナ、それから警保局長ならと略ぼ相談が纏まつた処が、内閣は俄然瓦解しおつた……」

「呀〳〵ッ！」

「機一髪を仕損じたが、区々たる俗吏は丈夫の望む処で無い。官を棄つる事弊履の如しで……」

「尚だ官に就かんのぢやないか。」

「能く交ぜ返す奴ぢや。小説家志願だけに口の減らぬ男ぢやナ。併し汝が瘠肱を張つて力んでも小説家ぢやア銭が儲からんぞ。」

「政治家でも銭が儲からんぞ。」

「馬鹿を云へ。衆議院議員は追付け歳費三千円になる、大臣の年俸は一万二千円になる筈ぢや。」

「其時は小説の原稿料が一部一万円位になる。」

「懸賞小説は矢張十円ぢやらう。」

「壮士の日当は一円だ。」

「はツはツはツ、新聞配達が何云ひくさる……」

「ごろつき壮士が……。」

「何ぢやと……。」

と鉄拳将に飛ばんとする時、隅の方に蹲まつた抱巻がムク〳〵と持上つて、面長な薄髯の生へた愛嬌のある顔が大欠伸をした。

「両君、相変らず詰らない喧嘩をしますナ……」

と伸をした手で腕を撫りながら、「銭が儲かるの儲からんのと政治家や文学者を気取る先生方が俗な事を仰しやる。銭が儲けたいなら僕の所為をし給へ。君達は理窟を云ふが失敬ながら猶だ社会を知つておらんやうだ。先ア僕の説を聞給へ。斯う見えて僕は故郷に在た時分は秀才と云はれて度々新聞雑誌に投書をして褒美を貰つた事もある。四五年前の雑誌を見給へ、駿州有渡郡田子の浦在駿河不二郎の名がチヨク〳〵見えるよ。それだから故郷を出る時は矢張人並に学若し成らずんば死すとも帰らずと力んだが、さア東京へ来て見ると迚も満足な学費が無くては碌な学問は出来ない。新聞や牛乳の配達をして相間に勉強しやうてのは、（亀井君は現にやつておるが）、実は中々忙がしくて、片手間の勉強で成効しやうてのは百年黄河の澄むを待やうなもんだ。所で僕は発身して商人と宗旨を換え、初めは資本が無いから河漾ひの人足に傭はれた事もある。点灯会社に住込んで脚達を担で飛んだ事もある、一杯五厘のアイスクリームを売つた事もある。西瓜の切売をした事もある、とゞの結局が縁日商人となつて九星独判断、英語独稽古から初めて此頃では瞞着の化粧品と小間物を売つてマゴ〳〵しておるが君、金を儲けるのは商人だよ。殊に縁日商人位泡沫銭の儲かる者は無い。僅か二両か三両の資本で十両位浮

く事がある。尤も雨降のアブレもある。品物のロウズも出るから儲かるほどに金は残らんが、なにしろ独立の商人でお客様の外は頭を下げずに太平楽を云つて、定つた給金と違つて不意の所得の入る処が面白い。君だから内幕を話すが二銭に三箇の石鹸ナ。あれは一百一貫の品だ。一と晩に一百売ると五貫余儲かる、夏向になると二百や三百は瞬く間に売れる。一番高い六銭の石鹸ナ、あれは一グロス二両と四貫だ。あの品が躰裁が妙に出来てるんで素人が惚込んで三ダースや四ダースは直ぐ売れる。それから歯磨ナ、あれはココ」に傍点」になつてる歯磨を升で買つて来て竜脳を些とばかり交ぜて箱詰にして一と晩置くとプンと好い香がする、そいつをオンタケ散とか豚印とか好い加減な名を付けた袋へ入れて一と袋一銭五厘に売るんだ。奈何だい、商人の楽屋は驚いたもんだらう。尤も僕の商売は夏向で冬は閑な方だが、こゝ君達に一つ秘策を授けやうかナ。懸賞小説を書いたり政治家の尻馬に乗るより余程気楽に儲けることが出来る。斯ういふ商売だ。牛込や神田には向かんが本所、下谷、小石川の場末、千住、板橋辺で滅法売れる、肭あかぎれ霜傷の妙薬鶴の脂、臙脂の脂、此奴が馬鹿に儲かるんだ。なアに鶴や臙脂が滅多に取れるものか。豚の脂や仙台鮪の脂肪肉で好いのだ。脂でさへあれば肭あかぎれには確に効く。此奴を一貝一銭に売るんだが二貫か三貫か資本で一晩二両三両の商売になる。詐偽も糞もあるもんか。商人は儲けさへすりやア些と位人に迷惑を掛けても関はんのだ。今の大頭株を見給へ、紳商面をして澄ましてやがるが、成立は悉皆僕等と仝じ事だ。今でも猶だ其根性が失せないから大きな詐偽や賭博の欺瞞をやつて実業家だと仰しやいますワ……」

と滔々と縁日の口上口調で饒舌り立てる大気焔に政治家君も文学者君も呆気に取られて眼ばかりパチクリさせてゐた。処へ案内もなく障子をガラリと開けて、方面無髯の毬栗頭がぬうッと顔を出した。

「やア、片岡、奈何じやい？」と政治家は第一に口を切つた。

「ふゥむ、」と得意らしく小鼻を揉めかしながら毬栗頭は褪げチヨロケた黒木綿の紋付羽織をリウとしごいて無図と座つた。

「首尾よく落第かナ？」

「勿論及第しおつた、」と毬栗君は大得意で有つた。

「君、及第しましたか？」と新聞配達の小説家は眼を睜つた。

「諸君、最う馬鹿にし給ふな、片岡禅吉は最早托鉢坊主ぢやないよ、明日辞令を請取れば台湾総督府の巡査片岡禅吉ぢや。大いに新領土の経営をして日本国家に報ゆる覚悟ぢや。」

「壮快々々。一番片岡君の為め祝宴を開いて万歳を称へやう、」と伊勢武熊は傲然として命令するやうに、「そこで会場は横町の牛店として駿河君は実業家ぢやから会費の半分を負担し、亀井君は懸賞小説が当選るさうぢやから登用人材の片岡君と共に残る半額を負担すべし。処で俺は当分志を得んから諸君の御馳走になるのぢや。あツはツはツ……。」

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆85　貧」作品社
　　1989（平成元）年11月25日第1刷発行
　　1991（平成3）年9月1日第3刷発行
底本の親本：「社会・百面相」岩波文庫、岩波書店
　　1953（昭和28）年2月
入力：渡邉　つよし
校正：門田　裕志
2001年9月20日公開
2006年7月5日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貧書生

内田魯庵

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/